

錦鯉 養殖、愛好家、品評会

錦鯉は 1800 年代より小千谷で飼育されており、この町の伝統の重要な一部となっています。鯉の養殖場や養殖技術は、何世代にもわたって継承されています。秋から春にかけてオークションが開催され、世界各地から鯉の収集家が集まります。日本全国の養殖家が、毎年開催される錦鯉の品評会に参加し、各自の最も美しい鯉を出品して「優勝」を目指します。

錦鯉の飼育

日本の錦鯉の養殖家の多くが、小千谷周辺の山がちな地域に拠点を置き、段になった池で鯉を育てています。4 月から 7 月上旬まで続く産卵期を通して、養殖家たちはつがわせる鯉を慎重に選びます。血筋に加え、体色の鮮やかさや体型といった身体的特徴などが、つがわせる工程を左右します。稚魚が誕生すると、もっとも鮮やかで特徴的な模様を持つ鯉が選定され、販売に向けて飼育されます。

水と土壌の質は、健康な鯉の飼育において大きな役割を果たします。小千谷周辺の山々の豊富な雪解け水が、ミネラル豊富な、新鮮できれいな地下水を池に運んでくれます。この地域の養殖家たちは、長年にわたる経験と観察により、池が掘られたところの土壌の種類が、様々な種類の鯉の健康な発育に影響を与えると結論しています。例えば、養殖家たちは、多色の「昭和三色」は砂土の池が適しており、赤と白の「紅白」は粘土が豊富な土でよく育つと考えています。

鯉は、生まれた年の 9 月に販売に適した大きさになり、2～4 年後に成体になります。秋から春にかけて、小千谷、また愛知県や広島県といった錦鯉の養殖が盛んな日本の各地でオークションが行われます。

小千谷の錦鯉漁業協同組合は約 60 の養殖家から構成されており、養殖される鯉の多くが国外へ輸出されています。

趣味としての錦鯉の飼育

1960 年代、錦鯉の飼育は日本で人気が広がり、海外でも高く評価されはじめました。現代の輸送技術の進歩により、鯉の安全な長距離輸送がより容易になり、世界各地の錦鯉愛好家は現在も増加中です。鯉は様々な環境によく適応し、30～40 年生生きることができます。

日本の生きた宝石の展示

錦鯉の品評会は、早くも 1912 年から、日本各地で毎年開催されています。これらの品評会は、養殖家たちが各自の最も優れた鯉を展示する機会となります。世界各地から鯉の愛好家や養殖家達が集まり、鯉の体色、輝き、模様、およびその他の数々の特徴に関する評価が行われます。体型が特に重要であり、入賞する錦鯉は、脊椎に沿ってよく発達した筋肉のある紡錘型の体型を持つ傾向があります。

東京で開催されるのが通例の全日本総合錦鯉品評会は、もっとも権威ある品評会の 1 つに数えられます。1968 年の第 1 回品評会では、錦鯉が日本の国魚と位置づけられました。以来、同品評会は毎年 1 月に開催されており、通常は約 1,900 匹の鯉が出品されます。他の有名な品評会には、11 月に開催される全日本愛鱗会の品評会（開催地は毎年変わります）や、4 月に新潟で開催される錦鯉全国幼魚品評会などがあります。